

## 「里山の維持再生ゾーン」の実現に向けて

～市民協働による持続可能なまちづくりのモデルケースとして～

節電が、今年の夏の大きなキーワードになっています。

今回は、学研木津北地区で活動をする、NPO法人 京都発・竹・流域環境ネットが活動支援をおこない、放置竹林を活用して団扇づくりに取り組んだ京都府立大学の学生たちの取り組みを紹介します。

里山の恵みには、今回のように、暑い夏を涼しく過ごすための素材のほか、日々の生活のやすらぎの空間や、生きもの観察や野外活動など、さまざまな楽しみ方があります。みんなでこの環境を守っていきましょう。



### 吹かせよう涼の風

この取り組みは、大学が学生に募った節電対策事業で、放置竹で作った団扇200枚、間伐材で作った網戸100枚、すだれ20枚の作製を学生たちがおこなったものです。

きっかけは、熱中症等が大きく取り上げられる中、暑さに対して我慢ではなく、楽しく夏を過ごすために何かできないかということでした。7月3日～6日には、学生を中心に、放置竹を使った団扇のワークショップもおこなわれました。

今回のテーマ「夏を涼しく楽しもう」について、学生の中心メンバーである古谷真理子さんに話を伺いました。



ワークショップで放置竹林の現状について説明するメンバー



### みんなでつくりあげる満足感

今回の学生が所属している研究室では、京都の放置竹林関係の研究をしているメンバーもいたので、団扇の材料は京都の放置竹林の竹を用いて、一から作ることに決めました。

団扇を作ることは、そんなに難しくないと考えていました。しかし、いざ作り始めてみると、柄の部分を滑らかにするのに手間がかかったり、団扇の骨を割くのが難しかったりと、職人技のすごさということを理解しました。

何十回と試作を重ねようやく完成したとき、みんなでひとつのものを作りあげる達成感は格別でした。そしてお互いにコミュニケーションを図ってこれたことはメンバー全員の財産です。

また、実際に竹に触れることで、竹の繊維構造なども実感でき、日ごろの研究とは違った満足感もありました。

### 自分自身も気持ちに変化が

今回の取組では、みんなでできることを、団扇の裏面にデザインしました。

こうした活動で個々の節電意識も高まり、例えば服装も、今までより涼しく過ごすための工夫をしたり、扇風機の前に冷凍した水入りのペットボトルを置いて納涼を図っています。

このワークショップに参加してくれている学生も、みんなが楽しく取り組んでいます。みんなの笑顔を見ていると少しずつでも、節電に向けた意識改革につながればと思いますし、この団扇を手にした学生が、少しでも放置竹林の問題にも関心を持ってくれればと思います。



学内でも浴衣で涼しく  
(左から三番目が古谷さん)